

金 沢 大 学

実施報告

(1) 実施責任者報告

金沢大学大学教育開放センター長 古 田 孝 臣

1. 放送公開講座の大学における位置づけと放送局その他の関係機関との協力関係について

本学の放送公開講座は、本学の一部局である大学教育開放センターが、大学教育の地域社会への開放という役割に基づき、学内各部署の協力を得て、一つには、印刷教材やスクーリングを伴うマルチ・メディアの講座であること、いま一つには、大学のキャンパスに直接足を運ぶことの困難な遠隔地の学習者に学習情報を提供すること、の2点でとくに重要な機能を果している。

放送局との間では、テーマ設定の直後から、意見交換の機会を持ち、講座の構成・順序、番組制作の過程での打合わせ、受講生募集のPR等、多面にわたって連携を保ち、良好な協力関係を維持している。

本学の場合、他の機関に所属する講師の協力を求めることが多いが、本学の講師と良好な人間関係を保持している方々を中心に、それらの講師やその所属機関とは、極めて良好な関係にある。

2. テーマの選定とそのねらいについて

テーマの選定については、1. で記した学内各部署の協力関係の現われとして、本センターの「運営委員会」（8学部、1短期大学部、1研究所および教養部からそれぞれ1人代表として選出の委員によって構成）の中に、放送講座小委員会を設け、それに本センターのセンター長および専任教員が加わって、全学の意向が十分に反映されるよう特に留意して行われている。

本年度のテーマについては、昨年度末に本学で開催された第4回放送利用の大学公開講座シンポジウムの主題が「地域課題と放送公開講座」であったのにちなみ、地域課題を踏まえた内容のものを選定した。

3. 番組、印刷教材、学習指導の関連づけについて

番組と印刷教材との関連では、原則として基本的な内容は同一とすることとしたが、ラジオ講座にあっては、主任講師の所見にみるとおり、「放送とは一応直接の関係はなく、独立した読み物として編集執筆」された。

番組と学習指導との関連では、番組の進行とかわりなく講師が全員出席することとし、受講生と講師の接触度を高めることを図った。また、第3回日のスクーリングは、あらかじめ徴集した質問事項を中心にとりすすめた。

4. 番組の学習効果について（講師の印象、受講生の反応等から）

テレビ番組については、正規の受講生が少ないにもかかわらず、番組のみによる学習者は、視聴率等に基づく推定によれば、おおむね6,000人前後であり、両者の乖離が大きい。

後者については、公開講座の本来のねらいに反して、趣味的な断続した学習が多かったと推察される。

正規の受講生にかかる学習効果については、主任講師の所見に委ねる。

5. 印刷教材の作成過程について

本年度の印刷教材の作成は、テレビ、ラジオ両科目とも、従前どおりの方針・方式で行われた。テレビ科目の場合、第一回講師会議の席上、講座全体の構成および各回の中心テーマの確認を行い、講師間の共通理解を図り、「印刷教材の作成方針」を確認の上執筆にとりかかった。各講師により執筆された原稿は、一度主任講師のもとで全体的な調整を経て印刷に付された。校正は各回担当講師のほか主任講師および本センターが行い、全回にわたり内容的技術的な調整を行った。

ラジオ科目については、講師が一人であったため、これまでどおりの方針を確認し、それに従い原稿執筆がなされた。原稿完成後はテレビ科目と同様の手順を経た。

6. 学習指導の実施状況について

科 目	回	月 日 (曜)	時 間	場 所	参加人員
ラ ジ オ	第 1 回	10月 4日 (日)	13:30～16:00	金沢大学教養部教室	6人
	第 2 回	11月 15日 (日)	13:30～16:00		2人
	第 3 回	1月 17日 (日)	13:00～15:00		3人
テ レ ビ	第 1 回	10月 4日 (日)	13:30～16:00	金沢大学教養部教室	7人
	第 2 回	11月 15日 (日)	13:30～16:00		3人
	第 3 回	1月 17日 (日)	13:00～15:00		5人

7. 「大学教育の地域社会への開放」に果たす役割について

1. で記したように、本学は、従前からこの課題をとくに重視して公開講座を実施してきているので、地域住民の認識が深まってきている。たとえば、通常の公開講座の受講生が放送講座にも加わったり、初めて放送公開講座の受講生となった人がその後の通常の公開講座にも加わるなどの例がみられる。

反面、大学からみて遠隔地に住む学習者や、ラジオ講座の主任講師が指摘しているとおり営業でクルマを駆ける人びとのように、キャンパスに来る機会が得がたい向きに学習情報を提供する役割は大きいと考える。

8. 「大学の授業への活用」の状況と今後の可能性について

本学の放送公開講座は、7.に記した理由により、主として地域住民に学習情報を提供することに重きをおいているので、一般的に言えば、「大学の授業への活用」は、他の大学の「番組」ほど多くはないと考えられる。

9. 実施上の問題点と今後の課題等について

テレビ番組については、テーマを早く選定したうえ、季節に適合した映像を撮ったり、さまざまな既存の資料を広範に探索したりする必要があるので、前年度から準備を始められる措置が望まれる。

(2) 科目担当主任講師の所見

(テレビ科目) 大地と人間 ―土木工学のロマン―

主任講師：工学部教授 小堀 為雄

1. 講座を開始するまで

昨年初頭に大学教育開放センターの委員から今回は是非、都市づくりなど土木、建築関係の講座を担当してもらえないかという話がありました。しかし、この講座は2～3度見たことはあるが、確か日曜日の早朝だったことと、準備が大変だな、という感想が残っているだけだった。

テレビは一般社会人対象であることから、土木という分野の学問がこの講座になじむだろうか、という点について考えました。しかし、いずれにしろ、関係教官の方々の協力が得られなければと考え、相談したところ、心配事が沢山あり自信もないが、一般の方々に少しでも我々の分野が知ってもらえればということで、取り組んでみようということになり、北浦勝教授、鳥居和之講師に具体的なお世話をお願いすることで、スタートすることになりました。

まず、タイトルですが、一般視聴者に魅力あるものにしようと考え、「土木のロマンと可能性―暮らしと産業を支える土木―」はどうか、とのことで検討しました。そして大学教育開放センターやテレビ局との打合せ会、各講師から各回毎のテーマを出し合って検討した結果、各回毎のテーマの1つであった「大地と人間」をメインテーマに採用し、それに、「土木工学のロマン」をサブタイトルとすることになりました。放送開始は10月3日(土)から、13回シリーズということで、制作準備に入りました。

2. 資料集めと番組制作

先にも書きましたが、我々が大学で行っている講義内容がテレビ講座になじむだろうか、すなわち、大学ではこの分野の専門家となる学生を教育しており、どちらかと言えば、基礎的な理論から講義しているもので、一般の社会で見られる土木としての道路や橋やダムなどはその応用として造

られているものであるからです。しかし、講座を担当するからには一人でも多くの視聴者に見ていただかねばなりません。

3. 録画にあたって

毎週、水曜日を資料整理と打合せの日とし、翌木曜日を本番録画の日として、開始したのが昭和62年7月1日（水）、2日（木）でした。

講師の方々は、なれない映像としての資料収集、番組の組み立て、シナリオの作成とほんとうに大変なことだったと思います。そして、それに続く録画撮り。テレビ局のスタッフの方々もテーマが一般社会日常の事柄であることや講師の方々の熱心さとあいまって、精力的な協力をいただきました。

“フィリップ”、“テロップ”、“1カメ、2カメ”、“5秒前、4秒前、3秒前、2秒前、1秒前、ハイスタート”と耳なれない用語とライトで、録画が終わるとホッとしました。しかし、実際の放送ではどうなっているだろうかと心配の連続でした。

4. 反 省

昭和62年12月26日（土）早朝5時45分から6時30分、第13回の放送をもって終了した。全体として次のように言えると思います。

- (1) 大学と社会との接点のむずかしさを通感した。これまでは大学は卒業生を通じて社会と接していたようであるが、この講座が直接的な場を持つ、とすれば、その対応に相当の工夫をしなければならない。
- (2) 視聴者のターゲットをどこにするか。
- (3) テキストおよびスクリーニングをどうするか。テレビ放送を主体とするのか、スクリーニング重視とするのか。
- (4) 当面は試行錯誤となるが、企画は1年ほど前から行った方がよいのではないか。
- (5) 時間帯はもっと改善できないのか。

また、最後にスクリーニングや視聴率を見て、わが国の社会人教育のむずかしさを痛感した次第です。

（ラジオ科目） 北陸の風土

主任講師： 文学部教授 金 崎 肇

1. 講座内容について

北陸地方の地域性を、「自然と人間の相互作用の研究」という地理学の原点から解説し、21世紀のヴィジョンに向けて、北陸地方の将来像について述べたものである。13回のうち1回はアナウンサー（受講生の代表の意味で）の質問に答える形、4回分はテーマに応じて、富山技術大の北林教授（地域開発に精しい）と対談形式で話をすすめ、全体の講義に変化を与えるようにした。

2. テキストについて

全体の構成は放送に合わせて13章として夫々小テーマを扱ったが、(1)地理学の基本的分野である「地域論」の立場から北陸をどう捉えるか、(2)雪国という北陸の自然、長い間に米の単作地帯として存続するようになった北陸、両者の相互作用の中で「自然」は人間の活動にどのような制約を及ぼして来たか、(3)地域開発、総合開発の中で、人間はこの自然の制約をどうハネ返し（私は「自然への反逆」という言葉を使った）自然の持つ無限の「可能性」をどう引出して来たか、(4)21世紀に於ける北陸での人間の活動（主として産業活動）はどうあるべきか。特に「雪国」としてのハンディキャップを従来の「耐雪」的考え方から、「克雪」へ、次いで「利雪」（資源とみて利用を考えるのも1例）と進むべきという考え方を大きく4つの分野からアプローチした。

3. 放送、スクーリング、受講上の反応など

- 毎週（土）の夜9時から45分間という放送時間帯は良いと思うが、（月）の夜のような平日が良いのではないか。
- クルマの中で聞いたという人が意外と多く今更のようにクルマ社会の現実を知らされたので、放送内容に工夫すべきことを感じた。
- 放送とテキストは一応直接の関係はなく、独立した読み物として編集執筆したが、いわゆるラジオ講座のテキストとは異なり、放送者と受講生の媒体として作成したので、一般の人々にも活用してもらう方法を考えるべきであった。つまりテキストの活用法である。
- スクーリングは3回だけではなく、毎週かせめて隔週程度に開いてはどうか。その為には放送局など、出席し易い場所が相応しい。こうすることにより受講生を多く捉え得ると思う。
- 放送はテーマによって少し短い時間のもの、その代わり週2回といった講座があってもよいかな。テーマは「地方的」なものを選ぶのは大賛成であるが、受講生にとって、抽象的なテーマにも要望が強いが、このカネ合いをどうするかが課題。

4. 全体としての所見

- 担当者の選定、内容の選択については、事前に充分検討する必要がある。お座なりに担当者を決め、テーマなどもお任せ式のイージーな態度はさけるべきで、委員会で企画演出する位の気持で、相応しい人選をすべき。
- 数年前のもので評判の良かったものを再放送したり、同様のテーマでも別の角度から、それを使って補説または受講生とゼミ形式で行うものを収録するような方法はどうか。

制 作 報 告

(1) 制作責任者報告

北陸放送報道制作局テレビ制作部長 牧 野 宏

1. 番組制作の基本方針と大学その他の関係機関との協力関係について

今年度の金沢大学公開講座は地域性を全面的に押し出すとの基本方針で番組制作をすすめた。

テーマが土木工学であるため現地での取材は必要不可欠であり、地元の行政、企業サイドともコンタクトをとりながら比較的早くから取材に入った。

講師もスタジオだけでなく現場で解説する方法をできる限り多く取り入れた。

しかし土木の分野は例えば土質についていえば、雨や雪で土質の状態が大きく変化するため、天候条件にあわせて何度か現場との間を往復することもあり手間がかかっている。

こうした中で制作が順調に進んだのは、大学側の対応が適切でネットワークがよかったことがあげられる。

この点で双方の協力関係は円滑であった。

2. 番組の企画、構成及び制作上の工夫、特色等について

テレビ……構成面では従来からのインターミッションのほかに金沢在住の外国人をオブザーバーとしてゲスト出演させるなど、あきさせない45分間を演出することに心がけた。

テーマ曲、番組挿入曲についてはすべてオリジナルとし、朝の番組にふさわしい明るい感じのものを地元の若者に依頼し作曲した。具体的にはオリジナル曲を3曲使用した。

ラジオ……テーマが地理学主体であるということから、取材などによる素材を使わず歴史的事実を踏まえながら、21世紀にむけての北陸の未来像を模索するという構成とした。その意味でも主任講師が13本全部にかかわったのは一貫性をもたせることができ意義があった。

講師の語りは温厚でテキストをもたないリスナーも一般教養番組として聞くことができた。

3. 番組の視聴状況と成果（評価、反応）について

テレビ……視聴率は1%足らずと低く、スクーリングに参加する受講生も少なく期待はずれの感はない。原因は放送時間が早朝であること、一般教養としてはとらえにくいテーマであったことなど種々の要素が絡まっていると思うが、視聴者や受講生に対するPRを強める必要があると考える。

番組としての評価は、出演講師の努力、構成面の工夫によりまずまずであった。

ラジオ……視聴率調査期間中の数字はよいとは言えないが、一般主婦からの反応もあり、楽

しく、興味をもてるとのことであった。

視聴率調査によれば、中高年の数字は通常番組のそれと同等か若干高い場合もあり、ターゲット年齢の範囲では合格と評価している。

4. 実施上の問題点と今後の課題等について

テレビ……一般視聴者にとって工学理論は難解でなじみにくい。このため制作担当としては、高度な理論を分りやすくしようと努力する。

この場合、専門的知識を要求する受講生は物足りなさを感じる。

大学講座のレベルについては、過去くりかえし議論されているが、今年度は特に視聴者層がより専門的知識を求めているように感じられ、テーマによっては割り切りが必要と思われる。

ラジオ……受講者数が少なかった点が課題として残る。視聴者を受講生へと交換させる対策が必要である。

(2) 番組制作担当者の所見

(テレビ科目) 大地と人間 —土木工学のロマン—

制作担当者： 北陸放送報道制作局テレビ制作部 西 川 嘉 一

大学公開講座は、他の番組と多少性格を異にしている。視聴率とは別に視聴質が問われるからだ。しかし制作者はもちろん講師も、自分の講義がどれだけの人に見られているのか気になるのは当然である。

講座終了後の反省会でも、最近では、視聴率に関する話題が大学と放送局の間で多くなっている。残念ながら今年度の金沢大学公開講座(大地と人間—土木工学のロマン—)は、視聴率は低かった。放送時間帯(土曜日午前5時45分～6時30分)が早朝であるとか、テレビ局側の対応の問題もあるが、毎年同じ時間に放送していることからこの点を除いて、低視聴率に終わった原因を分析してみた。

過去の講座をみると、医学系、文系のテーマに比べ工学部系は視聴率が伸び悩んでいる。工学部系のものは、理論が難解で、一般教養としては受け入れにくいという先入観があるからだろうか。作る側としては、わかりやすい解説を心がけているのだが、大学講座ではやはり限界があるようにも思う。

もう一点はテーマの中に、地方の問題をどのように位置づけていくかということだ。地域性に全くとらわれず講義を進めていくというのには、やはり疑問がある。なぜなら地域の問題だけで講座を展開していくこと自体不可能である以上、各大学がもつ地域性にこだわる必要があろう。

といって地方の時代であることをむやみに力説するだけでは、なかなか視聴率には結びつかない。視聴者が興味をもっているテーマを調査し、一般教養の中で地方色を浮きあがらせていくことが、受

講生の学習意欲を高める近道であるようにも思う。

(ラジオ科目) 北陸の風土

制作担当者： 北陸放送ラジオ制作部 西 島 樹 雄

スケジュール的には、5月に主任講師をまじえた第1回目の全体打合せが行われ、その後、局側担当ディレクターと主任講師が随時打合せを行ない細部にわたって煮つめていった。

録音は7月21日の第1回目を皮切りに、主任講師の過密スケジュールの合い間をぬって12月7日には最終回を録り終えた。

主任講師が対談もしくは単独講義という形で13回全部にかかわったため、全体の流れに一貫性を保つことが出来、聴取者に対しては大変分かり易いものになった。

講師は長年にわたりラジオ放送の出演キャリアもあり、「自然と人間の関係」を考えるという遠大なテーマであるにもかかわらず、説得力と暖かみのある平易な語りが好評だった。

各回ごとのテーマとしては、地元の地理、気候、風土、そして経済など身近な事象を扱ったため、テキストを持たないフリーのリスナーにとっても一般教養番組として聞いてもらえるものになったと思う。

なお、6回、9回、11回、13回の各回に迎えたゲストの北林吉弘講師は、現在富山県立技術短期大学教授で北経連（北陸経済連合会）のメンバーでもあり、まさに「21世紀に向けての北陸のビジョン」を語るにふさわしい知識、情報を持ち合わせており、その内容は大変興味深いものだった。

サブテーマの一つの節目でもある3回目には、局アナを入れて質問コーナーを設け、講義内容をふり返りながら補足説明をするなどして、より理解を深めるよう努力した。

リスナーの具体的反応としては、一般主婦の「大変楽しく聞いています。」という話や、タクシーに乗り合わせた客から、「運転手が聞いていたので自分もつい聞いていたが大変興味をもてる内容だった。」などの声が寄せられた。

しかし一方、9月から講座開始に至るまで多数のPR、募集告知スポットをOAしたにもかかわらず、受講生の申し込みが意外に少なかったことが反省点として残る。

講座の概要

<科目の概要>

科 目 名	中心的なテーマ	科 目 の ね ら い	内 容 ・ 方 法
大地と人間 -土木工学 のロマン- (テレビ)	われわれ人間が、社会生活を営むうえで必要にして欠かすことのできない土木建設の具体的な内容とその重要性を、受講生の皆さんと一緒に考えていく。	土木事業とは治山治水、人間の厚生福祉の向上、および産業社会基盤の充実を目的とした施設建設、環境創造を意味している。関連専門領域は自然科学にとどまらず、人文社会科学をも含めた広範多岐、総合的な内容を含んでいることを理解する。	主として、石川県内の土木・建設による構築物、特に「ふるさとのランドマーク」とみなされるものの映像を用いながら、土木・建設工学の実際的応用の過程と成果を臨場感に満ちた構成で提示する。
北陸の風土 (ラジオ)	人間と自然の関係が長い間積み重ねられ、世界各地には自然に旨く適応した人間の生活の営みが生まれた。「さまざまな風土、さまざまな生活」といえよう。かゝる「自然と人間の関係」を論じ考えることは地理学の中心テーマである。	人間は自然に働きかけて生きてゆかねばならない。自然は人間の働きかけに対して、色々の制約を及ぼす。人間は、それらの制約を出来るだけ小さいものにしようと努めて来た。そのためには「自然の正体」を知ることが必要である。人間と自然のかかわり合いを探求するのがねらいである。	こうした自然科学にも社会科学にも亘る幅広い分野を扱う地理学の問題で例を北陸にとり皆様と共に北陸の風土を考え、さらに、21世紀に向けて、北陸はどの様になるか、われわれの生活をよりよくし、快適な生活環境にするにはどうせねばならぬかを、地理学の立場からアプローチする。

<各科目の構成>

(テレビ科目) 大地と人間 -土木工学のロマン-

主任講師：工学部 教授 小 堀 為 雄

放送回	放送月日	中 心 テ ー マ	担 当 講 師
第 1 回	10月3日	暮らしと産業を支える -土木の可能性-	工学部教授 小 堀 為 雄
第 2 回	10月10日	地震・雷・火事・おやじ…そして雪 -北陸の自然災害-	工学部教授 北 浦 勝 " 助教授 木 俣 昇
第 3 回	10月17日	石川県に大地震は来るか -北陸の地震防災-	工学部教授 北 浦 勝 " 助手 宮 島 昌 克 " 技官 池 本 敏 和

放送回	放送月日	中 心 テ ー マ	担 当 講 師
第 4 回	10月24日	動く大地 -土の力学-	工学部教授 太田 秀 樹 " 助手 松 本 樹 典
第 5 回	10月31日	水資源の確保と洪水防止 -北陸の河川計画-	工学部教授 高 瀬 信 忠
第 6 回	11月 7日	人と海岸の出会い -千里浜海岸の保全-	工学部助教授 石 田 啓
第 7 回	11月14日	コンクリートの寿命 -塩害、アルカリ骨材反応-	工学部教授 川 村 満 紀 " 講師 鳥 居 和 之 " 助手 竹 本 邦 夫
第 8 回	11月21日	安全な山間の道路をめざして -落石・なだれ防護工-	工学部教授 吉 田 博 浩 " 助手 榎 谷
第 9 回	11月28日	住みよい街づくり -都市計画とは-	工学部助教授 川 上 光 彦
第 10 回	12月 5日	都市の土地利用と交通 -住宅、土地、交通-	工学部助教授 松 浦 義 満 " 助手 沼 田 道 代
第 11 回	12月12日	情報化社会における土木計画 -住民参加と支援システム-	工学部助教授 木 俣 昇
第 12 回	12月19日	ふるさとのランドマーク -橋と建築-	工学部教授 小 堀 為 雄 金沢工業大学教授 水 野 一 郎
第 13 回	12月26日	美しい町並み -風土と景観-	工学部教授 小 堀 為 雄 金沢美術工芸大学教授 山 岸 政 雄

(ラジオ科目) 北陸の風土

主任講師：文学部 教授 金 崎 肇

放送回	放送月日	中 心 テ ー マ	担 当 講 師
第 1 回	10月17日	自然と人間のかかわり合い	文学部教授 金 崎 肇

放送回	放送月日	中 心 テ ー マ	担 当 講 師
第 2 回	10月24日	北陸地方は最近まで「表日本」 であった	文学部教授 金 崎 肇
第 3 回	10月31日	北陸の風土が生み出した生活 －雪国なるが故に、されど……－	”
第 4 回	11月 7日	風土への反逆と適応 (1) －米の単作地帯の形成と功罪－	”
第 5 回	11月14日	風土への反逆と適応 (2) －数々の伝統工業を生み 出した風土－	”
第 6 回	11月21日	風土への反逆と適応 (3) －近代工業への脱皮と苦悶－	富山県立技術短期大学教授 文学部教授 北 林 吉 弘 金 崎 肇
第 7 回	11月28日	風土への反逆と適応 (4) －北陸は人口の過疎地帯か－	文学部教授 金 崎 肇
第 8 回	12月 5日	風土への反逆と適応 (5) －今、始まった風土への反逆－	”
第 9 回	12月12日	21世紀へ向けての北陸 (1) －総合開発計画は地域開発の 特効薬か－	富山県立技術短期大学教授 文学部教授 北 林 吉 弘 金 崎 肇
第 10 回	12月19日	21世紀へ向けての北陸 (2) －中央政府依存型から内発型へ－	文学部教授 金 崎 肇
第 11 回	12月26日	21世紀へ向けての北陸 (3) －今、何故テクノポリスか－	富山県立技術短期大学教授 文学部教授 北 林 吉 弘 金 崎 肇
第 12 回	1月 9日	雪国新時代からの幕明け －雪国という風土からの テイク・オフ－	文学部教授 金 崎 肇
第 13 回	1月16日	国際化の波を北陸はどう受止めるか －日本の孤児とならぬために－	富山県立技術短期大学教授 文学部教授 北 林 吉 弘 金 崎 肇

金 沢 大 学

<スクーリング>

(テレビ科目) 大地と人間 ―土木工学のロマン―

回	実施場所	実施日時	備 考
第 1 回	金沢大学教養部教室	昭和62年10月 4 日 (日) 13:30～16:00	開講式(13:00～13:25) に引き続き行う。
第 2 回	金沢大学教養部教室	昭和62年11月15日 (日) 13:30～16:00	
第 3 回	金沢大学教養部教室	昭和63年 1 月17日 (日) 13:00～15:00	引き続き閉講式(15:10 ～15:30)を行う。

(ラジオ科目) 北陸の風土

回	実施場所	実施日時	備 考
第 1 回	金沢大学教養部教室	昭和62年10月 4 日 (日) 13:30～16:00	開講式(13:00～13:25) に引き続き行う
第 2 回	金沢大学 大学教育開放センター	昭和62年11月15日 (日) 13:30～16:00	
第 3 回	金沢大学教養部教室	昭和63年 1 月17日 (日) 13:00～15:00	引き続き閉講式(15:10 ～15:30)を行う。

<再 視 聴>

(テレビ科目) 大地と人間 ―土木工学のロマン―

実施場所	実施期間・日時	備 考
金沢大学 大学教育開放センター	昭和62年10月 5 日～ 昭和63年 1 月16日 10:00～17:00	日曜・祝祭日を除く。また、昭和62年12 月25日から昭和63年 1 月 4 日まで再視聴 サービスを中止する。

(ラジオ科目) 北陸の風土

実施場所	実施期間・日時	備 考
金沢大学 大学教育開放センター	昭和62年10月19日～ 昭和63年 1 月16日 10:00～17:00	日曜・祝祭日を除く。また、昭和62年12 月25日から昭和63年 1 月 4 日まで、再視 聴サービスを休止する。